宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川（ひらかわ） 新（あらた）

未来への航路

㉑ 瑞巌寺での接待

瑞巌寺の住職

ビスカイノとソテロが瑞巌寺前の船着場に到着すると、「ボンソ」（bonzo）というキリスト教の司教にあたる人が使いを寄こして、「もし接待をお受けくださるなら幸甚に思う」と、お寺に招いたそうです。瑞巌寺に立ち寄ったのは藩主政宗の勧めによるものでしたから、事前に連絡があり、非礼のないよう出迎えたのでしょう。

「ボンソ」とは坊主のことで、瑞巌寺の住職です。昭和16年刊の村上直次郎翻訳『ビスカイノ金銀島探検報告』では瑞巌寺九十九世の雲居和尚としていますが、忠宗に招請されたのは寛永13（1636）年のことですから、それより前の住職になります。九十六代の海晏陸は慶長16（1611）年に没していますので、元和8（1622）年に在職が確認できる九十七代の月叟だった可能性がありそうです。

住職は多額の収入を得てその寺を管理しているとビスカイノは書いていますが、これは住職の報酬ではなく寺領のことだと思われます。この時期の寺領は不明ですが、寛政年間は約七〇〇石の寺領を伊達家から与えられており、仙台藩の寺では最高の待遇を得ていました。

住職はローマ教皇のミトラ（冠）のようなものを頭にかぶり、教皇衣のようなものを着ていたとあります。教皇の冠や装束も相当に立派ですので（ベネディクト16世写真）、瑞巌寺の住職も最上級の僧衣を着て一行を出迎えたのではないでしょうか。

椅子と饗宴

おもしろいのは「座るところが絹で覆われた椅子」を出されたとあることです。当時の日本で椅子は京都御所や一部の寺院でしか使われていませんでした。禅宗系の寺院では曲録（きょくろく）という椅子が使われていますので、瑞巌寺にあったのはこれかもしれません。

調べてみたところ、瑞巌寺一〇〇世・洞水和尚が椅子に座った肖像画を見つけることができました。洞水和尚は、二代藩主忠宗に招請されて雲居和尚の跡を継ぎました。存命中の政宗や五郎八（いろは）姫の帰依をうけた和尚は、同じ松島の円通院・天麟院などの名刹も開いています。

洞水和尚の肖像画を見ますと、法衣と袈裟をまとった和尚が椅子に座った姿で描かれています。下部には椅子の脚が描かれていますが、全体に布がかけられていますので椅子の形は見えません。ビスカイノの記録によると椅子は絹で覆われていたとありますので、このイメージに近いかもしれません。

椅子は3脚用意されましたが、司令官のビスカイノは上座を宣教師のルイス・ソテロに勧めています。住職たちがソテロに敬意を払うようにしたとありますので、宗教上の権威を示すためにあえて上座を譲ったのでしょう。

もてなしの酒肴が出され、まずはソテロのため、次にビスカイノのために乾杯しています。乾杯の習慣がヨーロッパと同様に日本にもあったとビスカイノは書いています。酒宴の作法は洋の東西を問わず共通していたようです。当時は寺院でも酒造（僧房酒）していたとのことですので、瑞巌寺手づくりの酒が出されたかもしれません。

饗宴が終わったあとに会話がなされていますが、日本語が堪能なソテロが通訳をしたのでしょう。初対面でカトリック信仰を説くのは適切ではないので、仰々しい挨拶が交わされただけだったとのことです。キリスト教の宣教師は仏教僧と宗論をたたかわせて布教活動を行うこともありましたが、さすがに瑞巌寺ではそれをしかけなかったのでした。丁重な接待を受けていますので、敵対することを避けたのでしょう。

ローマ教皇ベネディクト16世のミトラと教皇衣（wikipediaより）

瑞巌寺洞水禅師肖像（一関市祥雲寺蔵）

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。